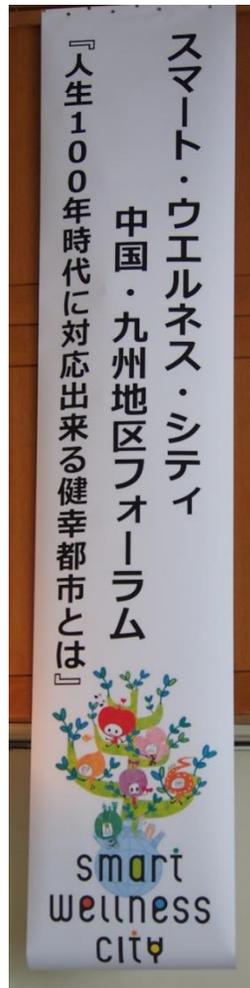


テーマ『人生100年時代に対応出来る健幸都市とは』

2019年7月4日(木)宇部市ときわ湖水ホール
参加者数：約150名（25自治体、21団体・企業）



左から つくばエリサーチ 塚尾晶子
湯梨浜町副町長 仙賀芳友
川崎町長 原口正弘
高石市長 阪口伸六
宇部市長 久保田后子
豊岡市長 中貝宗治
東神楽町長 山本進
筑波大学 教授 久野譜也



講演内容(1)

	登壇者	内容
	<p>■ 講演① 「SWC10年間の取組みから見えた成果の出る政策パッケージ」 久野 譜也 SWC首長研究会 事務局長 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 教授</p>	<p>SWCとは、「そこに住むと自然と健康になれるまち」を目指すもの。そのために本研究会では、思い付き・感覚で政策を進めるのではなく、エビデンスベースで検討し、新たなイノベーションとしての社会技術を構築することを目指す。</p> <p>地方都市と大都市の健康格差（地方は車がないと生活できない街になってしまった）が生じている。この問題は、変えようとしなければ、変わらない。そのための社会技術の開発に対して、SWCでは3つの戦略1）インセンティブ、2）まちづくり、3）ヘルスリテラシーの向上で進めてきた。これからの10年の人口減・高齢化が進むと、人口密度が減り、街の機能を維持できなくなる。街を変えるには時間がかかることから、早く行動に移さなければならない。</p>
	<p>■ 講演② 「SW高石の取組み」 阪口 伸六 SWC首長研究会 副会長 大阪府高石市長</p>	<p>高石市もSWCの理念のもと、ウォークブルシティ（歩きたくなる街づくり）を進めている。代表的な取り組みで、健幸ウォーキングロード（車線を減らして、歩道の広さを倍。せせらぎ空間・自転車専用道を設置）を整備した。多くの人ウォーキングしており、ハード面の整備により、市民の意識も変わる。また、ソフト事業として、健幸ポイント事業も進めており、現在3000人が参加している。市内のデータアップロード場所として郵便局も活用。さらに「暮らしのポーター」事業も実施し、市民からの相談事の取次を行う。</p> <p>今後、健康づくりは成果型に舵が切られる。高石市は、データをもとに重症化予防、健診受診率等に対して目標を定めて取り組んでいる。さらに、地域企業と連携し、健康無関心層を現役時代から取り込む。</p>
	<p>■ 講演③ 「SW豊岡の取組み」 中貝 宗治 SWC首長研究会 副会長 兵庫県豊岡市長</p>	<p>SWCに加盟し豊岡市の健康施策は大きく転換することになった。平成24年度に歩いて暮らすまちづくり条例・構想を定め、ポピュレーションアプローチとして、生活習慣病予防を目的とした筋トレとウォーキングの取組を重点的に取り組む。</p> <p>筋トレは3年間のモデル事業での成果をふまえ、現在、187集落3,000人に広がる。2015年の調査では、12万円の医療費抑制効果が確認されており、今後も普及したい。ウォーキングは運動健康ポイント制度を導入しており、昨年度1,065人が交換した。特徴として、ポイントを小学校等に寄付できる仕組みが受け入れられている（交換総額の53%が寄付）。</p> <p>また、働く世代をターゲットに今年からスマホアプリを導入し、30・40代を中心に4カ月で2000人が登録。これらの取組により、医療費抑制も夢のものばかりではないと考えている。</p>

講演内容(2)

	登壇者	内容
	<p>■ 講演④ 「SW東神楽町流 健幸のまちづくり －半減した人口を回復させた秘訣と今後への投資－」 山本 進 北海道東神楽町長</p>	<p>東神楽町は過去40年で人口が倍に増加。高齢化率も24.3%と低いが、今後は人口減と急速な高齢化が進む。そこで、この課題解決に向けて健康増進に取り組み始めた。</p> <p>特に幼児期からリテラシーを高める施策をしており、若者が移り住みやすくする整備も進めている。子どもから健康施策を考えていくことで垂直展開ができると考える。</p> <p>事業推進には庁内の部署を横断したプロジェクトチームを構成して実施。具体的に「ひがしかぐら健康くらぶ」ではICを活用したインセンティブ施策、健康食育コンシェルジュによる養成も進める。また、若い世代の獲得に向けて、脂肪燃えるんピックなどのイベントを実施する。</p>
	<p>■ 講演⑤ 「健康無関心層を減じる口コミ戦略」 塚尾 晶子 SWC協議会健幸アンバサダーPJ 事務局長 つくばウエルネスリサーチ 執行役員 保健師</p>	<p>健幸アンバサダーは、正しい健康情報を無関心層も含めた地域住民に心に届く情報として伝える役割を持つインフルエンサーの役割を担う。国の政策にも位置づけ、2020オリパラのレガシープランに位置づけられ、スポーツ庁、厚労省、経産省とも連携して取り組んでいる。</p> <p>先行研究で、ボランティアは進んで参加している人ほど、嫌々参加する人に比べて健康寿命が長いことが明らかとなっている。健幸アンバサダーは、自らの健康度を向上させ、大切な人の「心に火を付け」健幸の輪を広げていく。次世代に日本の素晴らしい社会保障制度をつなぎたいとの想いで取り組んでいる。</p>
	<p>■ 講演⑥ 「SW宇部の取り組み －多様な連携による健幸長寿のまちづくり－」 久保田 后子 SWC首長研究会 副会長 山口県宇部市長</p>	<p>高齢化社会に対して自治体も様々な取り組みをしているが、自治体の力だけでは無関心層対策・社会保障の維持等の対応は難しい状況にある。そこで、SWCの産官学の取組が期待される。</p> <p>宇部市は住みやすいまちづくりを中心に施策を実施。小学校区単位の担当保健師を配置し、健康リテラシー向上のため市民大学を開講し、まちかど健康情報ステーションを整備する。また、まちづくりとして、コンパクトシティと地域包括ケアを掛け合わせ、各拠点に包括ケアセンターを設置する。</p> <p>そして、2019年度より飛び地型の広域連携によるSIBプロジェクトがスタートする。インセンティブ施策とともに、スポーツの力でハイリスクな対象者への運動指導も行う。医療機関と連携し、スポーツクラブには入会できない疾患患者（心臓リハビリ等）も対象にしていきたい。</p>